



兼業農家で余暇就農の経営を行おうとすれば、作業時期を地域の許容範囲内で実施せざるをえず、余暇日時も制限されていることから機械整備を高めざるをえない。それがしいては過剰投資となり、米作の生産費を押し上げている。

「地域」は、土地や水利の利用調整を通して、地域全体の農業に影響を及ぼすものであるから、地域農業を変えようとする場合は、これらの土地利用を規制する地域

の申し合わせを変えなければならない。このことは、地域組織の改革に結びつく。

地域の組織改革を行う場合に、重要なことは、その組織革新の原理が、地域農業内に熾烈な競争原理を導入し、他を排除して自らが生き残るといふものでは決してなく、地域間では激しい競争を行ったとしても、地域内では共存共栄を原理としながら、それを行うことである。

### 生産工程の作業分担

#### — 地域の機能集団

農業生産は、土地と人の結び付きを基本としながら、作物、家畜など周到な管理を必要とする生物生産工程と、可能な限り省力化した労働生産性を求める機械、施設などの機械作業工程が、お互いに補完し合いながら前進をおこす。

この中で生物生産工程の担い手は個々の家族労働であるが、機械作業工程は個別を越えた地域の範囲に及んでおり、それぞれの担い手が機能を分担している。稲作を例にとれば、機械作業は地域の機械利用組合や農協育苗センター・ライスセンターなどが農地を面的にとらえた効率的な運用を図るが、収量に影響する追肥・かん排水などの管理は、個々の農家が分担し、それらが全体として関連し合いながら出荷に至るまでの栽培体系を構成している。

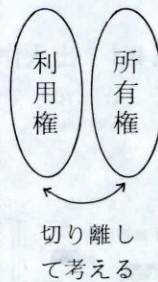
このように三隅農業の内部で、個々の農家や生産組織・農協などがそれぞれ行程や機能を分担しあい、全体で体系化されるといふことは、何も機械、施設の組織的な利用の面だけではない。多頭化した養豚農家の家畜糞尿は、二次発酵を経て良質な堆肥に生まれ変わるのでこれを三隅町の堆肥工場として位置付け、地域内無畜農家の申し出を受けて、機械利用組合が高効率機械で製品をば場へ自走散布することにより地力増強の促進に結び付けるなど、それぞれの担い手が機能分担することによって

農業本来の生体系である物質循環が保たれる。

これらは、いずれも生産行程の一部を個々の家族経営が担当するとしても、それでは完結できない諸機能を地域農業の単位で実現していこうとするものであって、個々の農家・生産組織・農協などの構成員が地域農業の枠組みの中で一つの生産システムを形成させようとするものである。

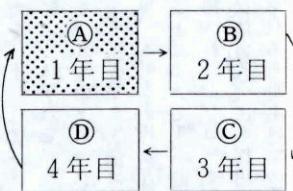
### 土地の集団的利用

#### — 基盤整備が鍵



個の生産から組織生産への転換は、農業の地域性を考えたと「集団的土地利用」が行われることでより一層前進する。前項で述べたように個別農家の農機具過剰投資を抑制するため地域の中で機械利用組合が組織され機能している。このことが、農機具の「所有と利用の分離」を可能にした。土地についても「所有権と利用権」を切り離して考える時期にきている。地域内の一定の面的拡がりの中で水田利用再編を契機に強く求められている田畑輪換耕作を行うため例えば集落など地域の農地を四等分してブロックローテーション体系をとる、このことは、その地域内で農地を保有する農業者の理解と合意が得られれば可能である。

### ブロックローテーション



①、②、③、④の順に輪作や転作団地を移動する。

### スケールメリットを發揮

#### — 集落営農

先進的な地域の取り組みをみると、農協またはその地域の中に必ず熱心なリーダーがいる。こうしたリーダーを中心に、集落の全農家が話し合い協力して問題を解決し、専業農家も兼業農家もみんなが良くなり、所得をふやす営農の仕組みができています。個々の農家単位にみれば所有する土地が零細で分散していたとしても、零細兼業農家だからといって排除される